安祥寺下寺跡発掘調査報告書

2023年

特定非営利活動法人平安京調査会

安祥寺下寺跡発掘調査報告書

2023年

特定非営利活動法人平安京調査会

例　言

1　本書は京都市山科区御陵平林町20－2番地で実施した、安祥寺下寺跡発掘調査報告書である。（京都市番号　23S047）

2　調査は共同住宅新築工事に伴い実施した。

3　現地調査は信和不動産株式会社より、特定非営利活動法人平安京調査会（以下、「平安京調査会」という）に委託され、吉崎 伸が担当した。

4　調査期間は令和５年８月７日から９月28日である。

5　面積は276㎡である。

6　本文、図中で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「安祥寺」を調整して使用した。

7　本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）である。

8　土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9　本書の執筆・編集は吉崎 伸が行った。

10　現地の記録写真撮影は吉崎 伸が行い、出土遺物の撮影は九鬼みづほが行った。

11　調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。

12　発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。

〔発掘調査〕吉崎 伸（平安京調査会）

作業員　岸波敏明・坪内孝二・川名貴樹・桜井文隆・小野寺健・木戸視月・坂巻花音・山口颯真

〔整理作業〕株式会社コンピュータ・システム、平尾政幸

13　本調査の検証審査員は京都橘大学、一瀬和夫名誉教授である。

14　発掘調査、整理作業において、下記の方からご指示ご指導をいただいた。記して感謝いたします。

（敬称略）

狭川真一（大阪大谷大学）、藤田瞬央（吉祥山 安祥寺）、鈴木久男（京都産業大学客員教授）

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡 …… 4
　1　地理・歴史的環境 …… 4
　2　周辺の調査 …… 5
第Ⅲ章　遺構 …… 6
　1　基本層序 …… 6
　2　第２面の遺構 …… 6
　3　第１面の遺構 …… 6
　a）　飛鳥時代の遺構 …… 6
　b）　室町時代の遺構 …… 6
　c）　江戸時代から明治時代の遺構 …… 11
第Ⅳ章　遺物 …… 15
　1　土器類 …… 15
　2　瓦類 …… 17
第Ⅴ章　まとめ …… 19

図　版　目　次

図版１　遺構　１．調査区から安祥寺を望む（南から）
　　　　　　　２．第１面全景（俯瞰）
図版２　遺構　１．第１面全景（西から）
　　　　　　　２．土坑 14（北西から）
　　　　　　　３．ピット 16土器出土状況（北東から）
図版３　遺構　１．土坑１（南西から）
　　　　　　　２．土坑 17（南から）
　　　　　　　３．土坑 18（南西から）

図版４　遺構　１．建物２(南から)
２．建物２東側柱列(北から)
３．建物２地下式礎石(南東から)
図版５　遺構　１．建物１(西から)
２．建物１西側柱列(南から)
３．建物１東側柱列(南から)
図版６　遺構　１．建物１北側柱列(西から)
２．建物１中央柱列(南から)
３．土坑８(西から)
図版７　遺構　１．第２面全景(西から)
２．風倒木跡１(南西から)
３．風倒木跡２(東から)
図版８　遺物　土器類
図版９　遺物　瓦類

挿　図　目　次

図 1　調査位置図(１：10,000)　……… 1
図 2　調査区配置図(１：800)　……… 2
図 3　調査経過写真　……… 3
図 4　調査区断面図(１：100)　……… 7
図 5　第２面平面図(１：120)　……… 8
図 6　第１面平面図(１：120)　……… 9
図 7　ピット 16・土坑 14・１・17・18実測図(１：50)　……… 10
図 8　建物２実測図(１：80)　……… 11
図 9　建物１実測図(１：80)　……… 12
図 10　石組池実測図(１：50)　……… 13
図 11　出土土器実測図(１：４)　……… 16
図 12　出土瓦拓影・実測図(１：４)　……… 17
図 13　出土瓦拓影・実測図(１：４)　……… 18
図 14　①拾遺都名所図絵　……… 20

図 15　②国土地理院仮製地形図　明治 25 年 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 16　③国土地理院正式地形図　大正元年 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 17　④京都市都市計画基本図　大正 11 年 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

表　目　次

表 1　遺構概要表 ・・・14
表 2　遺物概要表 ・・・18

第Ⅰ章　調査の経緯

１．調査に至る経緯（図１）

調査地は京都市山科区御陵平林町 20－２番地に所在し、安祥寺下寺跡に該当している。ここで共同住宅新築工事計画がされたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行った。この結果、土坑や溝などが検出されたため、発掘調査の指導がなされた。これを受け、信和不動産株式会社より特定非営利活動法人平安京調査会に発掘調査が委託され、実施した。

２．調査経過（図２・３）

調査は 2023 年８月７日より準備工、調査区の設定から開始した。調査区は敷地の南東部に東西 24m、南北 14mの長方形（北西の一角を欠く）、面積 276㎡を設定した。８月８日からは重機掘削を開始、第１面の調査に入った。第１面では江戸時代から明治時代の安祥寺に関連する建物や石組の池、室町時代の建物や土坑群、飛鳥時代の土坑などを検出した。

第１面の調査後､再び重機を搬入して地山面まで掘り下げ､ここを第２面として調査を実施した。第２面では第１面の遺構の残欠や風倒木の跡を検出し調査を終えた。調査の記録はドローンによる３次元測量と手描実測を併用して行った。その後、重機による埋め戻し、機材の撤収作業など

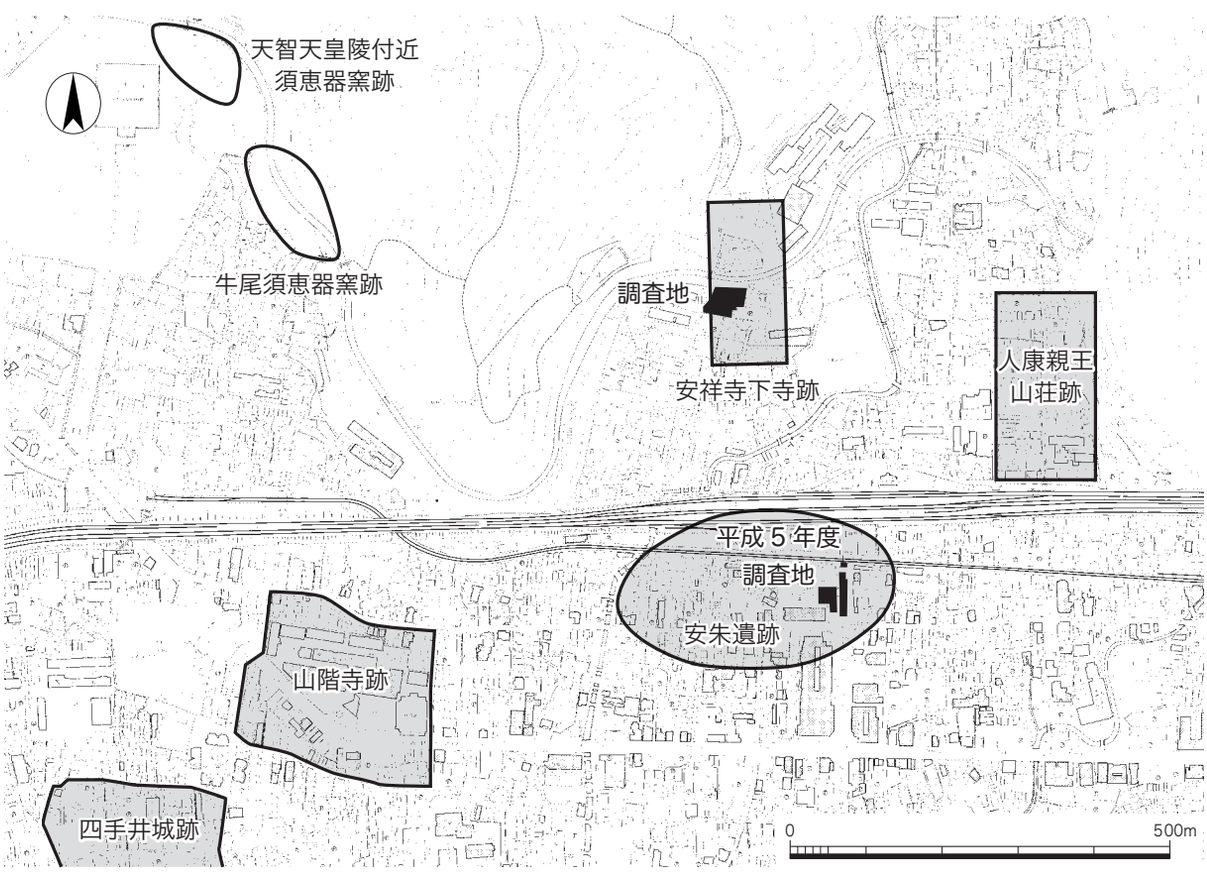


図１　調査位置図（1：10,000）

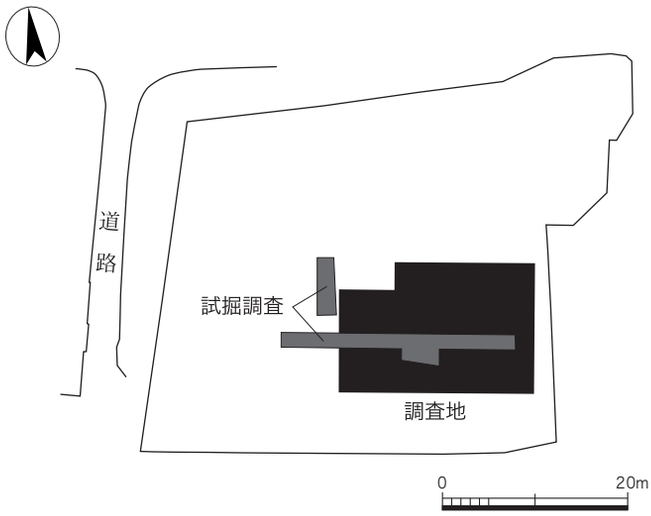


図２　調査区配置図（1：800）

を行い、9 月 28 日にすべての作業を終えた。この間、調査中は随時、文化財保護課の検査・指導を受け、調査面ごとに検証委員である京都橘大学一瀬和夫名誉教授の検査を受けた。また、調査中に安祥寺住職、藤田舜央氏の来訪を受けた。

1. 調査区設定

2. 重機掘削

3 調査区割り付け作業

4. 遺構検出作業

5. 文化財保護課の検査

6. 検証委員の審査

7. ドローンによる空撮

8. 調査終了状況

図3　調査経過写真

第Ⅱ章　遺跡

１．地理・歴史的環境

上述のごとく調査地は安祥寺下寺跡に推定されている。本来、安祥寺は平安時代前期の嘉祥元年（848）に藤原順子によって発願され建立された寺で、入唐僧恵運が開祖となった。藤原順子は藤原冬嗣の娘で、仁明天皇の女御として文徳天皇の生母となり、藤原氏による権力掌握のきっかけを作った人物として知られている。創建時の安祥寺は山上の上寺と平野部の下寺二つの伽藍を有していた。貞観年代末（875 年前後）には隆盛を極め、七百余りの塔頭坊舎が立ち並び、広大な寺領、多数の仏像や経典を有していたことが、恵運が記した「安祥寺資材帳」に記載されている（註１）。

その後、室町時代の永和２年（1378）には、台風によって倒壊した上寺の五大堂に安置されていた五大虚空菩薩像が、訪れた東寺の僧賢宝によって救い出され、東寺の観智院に引取られる記録が残っている。このころ上寺はほとんど衰退してしまったことがうかがえる。さらに、応仁・文明の乱で上・下寺の堂舎は灰燼に帰し、荒廃したと伝えられている。その後の安祥寺は、高野山とのつながりで命脈をたもっていたが、江戸時代（慶長 18 年）になって徳川家康の援助を受けて、伽藍が復興され、現在に至っている（註２）。

上寺跡については山科北方の山中に遺構が残されており、2002 年から実施された京都大学大学院を中心とした調査団によって、その実態が明らかにされている（註３）。一方、下寺跡についてはさまざまな研究者によって復元案が発表されているが、いまだその所在ははっきりしていない。しかしながら、2012 年に京都府立洛東高校の高校生研究グループによって興味深い復元が発表された（註４）。それによると、洛東高校のグランド付近に残された旧地籍境の屈曲部を、寺域の北西隅と仮定し、「安祥寺資材帳」に記載された下寺の規模（350m 四方）を当てはめて復元している。これはちょうど山科の条里、石雲北里の南東隅十町分に相当するというものである。また、後述する安朱古墓は復元した寺域の南西隅に位置している。なお、京都市遺跡地図に記載されている「安祥寺下寺跡」は現在の安祥寺伽藍を中心に復元されたもので、洛東高校生の復元案とは異なっている。

今回の調査地は、江戸時代に復興された安祥寺境内地の一画に当り、京都市遺跡地図に示された安祥寺下寺跡として調査を行った。調査地は安祥寺の伽藍と琵琶湖第一疏水（以下、疏水）を挟んで南側に位置し、山科盆地に南面する傾斜地をひな壇状に造成した所となっている。調査時は更地となっており、敷地の標高は海抜 80m前後でほぼ平坦、北側は疏水側道の法面、南側の民家の敷地とは約 3mの段差となっている。

２．周辺の調査（図１）

京都市遺跡地図記載の安祥寺下寺跡についてはこれまで発掘調査事例がなく、今回の調査が初例となる。近隣では市営地下鉄東西線敷設および山科駅前再開発に伴い２例の調査が実施されている（註５）。このうち、平成５年に実施された地下鉄敷設工事に伴う調査では、奈良時代から平安時代、江戸時代の遺構が検出されている。その中で特筆すべきは平安時代前期の古墓が発見されたことである。古墓は木炭木槨墓と呼ばれる特殊なもので、東西 3.4m、南北 2.0m、深さ 0.4 mの長方形墓坑の底に炭を敷き、中に据えた木棺と木槨の周囲にも炭を巡らせたものである。内部からは土師器の皿のほか蟠龍文鏡の破鏡が出土しており、高貴な身分の人物の墓と考察している。なおこの墓については安祥寺の発願者、藤原順子のものとする説もある（註６）。

註１　『安祥寺の研究Ⅰ－京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院』2004年
上原真人編『皇太后の山寺－山科安祥寺の創建と古代山林寺院』2007年

註２　「安祥寺とは」『吉祥山宝塔院安祥寺ホームページ』より

註３　註 1に同じ。

註４　『高校生が歩いて学んだ山科』平成 25年度京都市考古資料館・京都府立洛東港高等学校合同企画展パンフレット　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館、京都府立洛東高等学校（普通科総合選択制人文社会コース）

註５　「安祥寺下寺跡１・２」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。この報告では「安祥寺下寺跡」としているが、現在、京都市遺跡地図ではこの遺跡を「安朱遺跡」としている。

註６　註 3に同じ。この古墓については「安朱古墓」として遺跡登録されている。

第Ⅲ章　遺構

１．基本層序（図４）

調査地の基本層序は現地表面から0.5～1.1mが現代盛土、調査区南部に部分的に褐色砂泥層（焼土混）（10YR4/4）0.1～0.2m、その下に調査区全面に広がる褐色砂泥層（7.5YR4/4）（第１層）0.1～0.5m、その下に南側に部分的に、にぶい黄褐色砂泥層（10YR4/3）0.2～0.25m、その下は地山である明黄褐色砂泥層（2.5Y6/8）と続く。

このうち第１層とした褐色砂泥層（7.5YR4/4）の上面を第１面として調査を行い、飛鳥時代から近代（明治時代）の遺構を検出した。また、第１層を除去した地山面を第２面として調査したが、明確な遺構は検出できなかった。

２．第２面の遺構（図５・図版７－１）

第２面は地山面で北から南へ傾斜しており、北部の標高は79.3m、南部で78.2mと約1.1mの差がある。第２面では第１面で掘り残した遺構と、風倒木跡と思われる土坑を検出したにとどまる。

風倒木跡１・２（図版７－２・３）　調査区の東部で２か所検出した。北側の風倒木跡１は楕円形で長径3.5m、短径2.5m、深さ0.25m、南側の風倒木跡２は東西2.3m以上、幅1.4m、深さ0.3mで、いずれも埋土は第１層とよく似た褐色砂泥層（7.5YR4/4）である。

３．第１面の遺構（図６・図版１－２、２－１）

第１面の遺構は飛鳥時代、室町時代、江戸時代から明治時代の大きく３時期に分かれる。

a）飛鳥時代の遺構

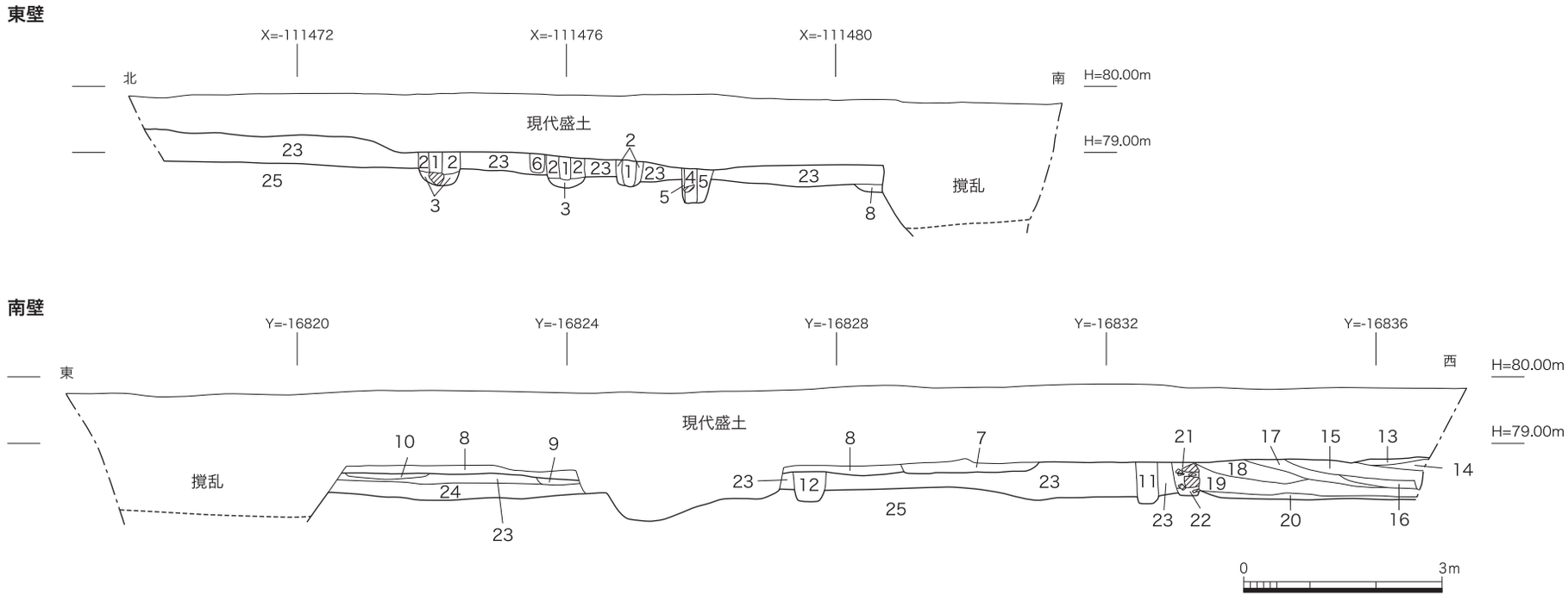
飛鳥時代の遺構は調査区の南東部で土坑（土坑14）とピット（ピット16）をそれぞれ１基検出した。

土坑14（図７・図版２－２）　楕円形を呈し、長径1.15m、短径0.85m、深さ0.16mである。地床炉とみられ、東壁を中心に赤褐色に焼け締まっている。埋土は２層で上層は褐色砂泥層（10YR4/4）で下層は黒褐色砂泥層（7.5YR3/1）で灰や炭を中心とした層が床面に薄く広がっている。埋土からは飛鳥時代後期の須恵器（杯）が出土した。

ピット16（図７・図版２－３）　円形を呈し、直径0.6m、深さ0.1mの浅い土坑と考えられる。埋土は暗褐色砂泥（7.5YR3/4）。埋土から飛鳥時代後期の須恵器（杯蓋）が出土した。

b）室町時代の遺構

室町時代の遺構は長方形の土坑３基（土坑１・17・18）と掘立柱建物１棟（建物２）を検出した。長方形の土坑はいずれもよく似た形状と埋土で、ほぼ同時期のものと考えられる。建物と一部の土坑は重複関係にあり、土坑が古い。



1　10YR4/4 褐色砂泥
2　10YR4/6 褐色砂泥
3　10YR4/6 褐色砂泥
4　7.5YR4/4 褐色砂泥
5　10YR4/6 褐色砂泥
6　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
（ピット）

7　7.5YR4/6 褐色砂泥
8　10YR4/4 褐色砂泥　焼土混
9　10YR4/4 褐色砂泥
10　10YR4/4 褐色砂泥
（土坑）

11　7.5YR4/6 褐色砂泥
12　10YR4/6 褐色砂泥
（建物１布掘り）

13　7.5YR5/8 明褐色砂泥
14　10YR4/6 褐色砂泥　礫混
15　7.5YR4/4 褐色砂泥　φ２～５㎝の礫・瓦混
16　10YR5/6 黄褐色砂泥
17　10YR4/6 褐色砂泥
18　10YR4/6 褐色砂泥
19　7.5YR4/4 褐色砂泥
20　5Y5/2 灰オリーブ色粘土（池底粘土層）
21　10YR4/6 褐色砂泥
22　7.5YR4/4 褐色砂泥
（土坑８）

23　7.5YR4/4 褐色砂泥（第１層）
24　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
25　2.5Y6/8 明黄褐色砂泥（地山）

図４　調査区断面図（１：100）

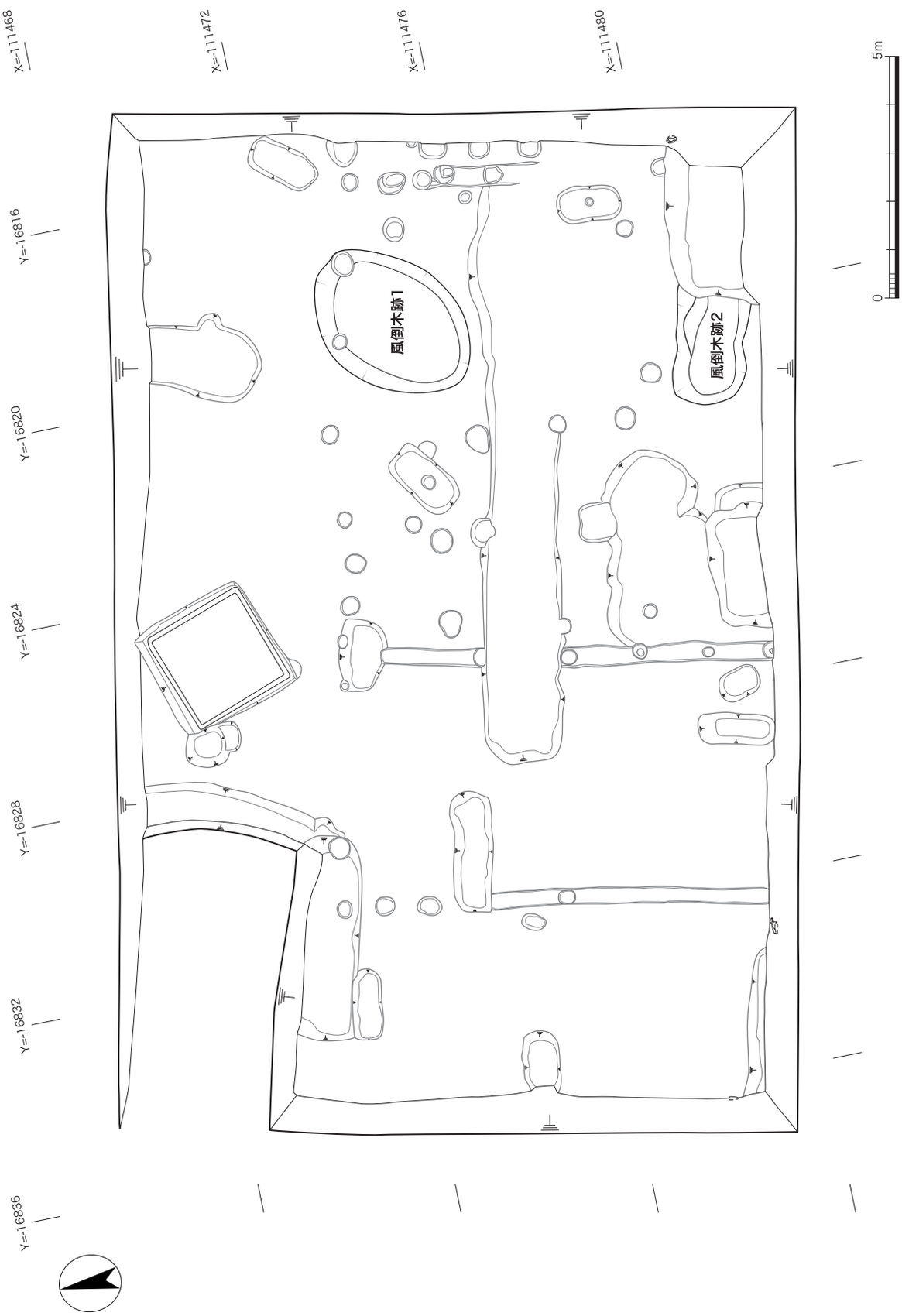


図５　第２面平面図（1：120）

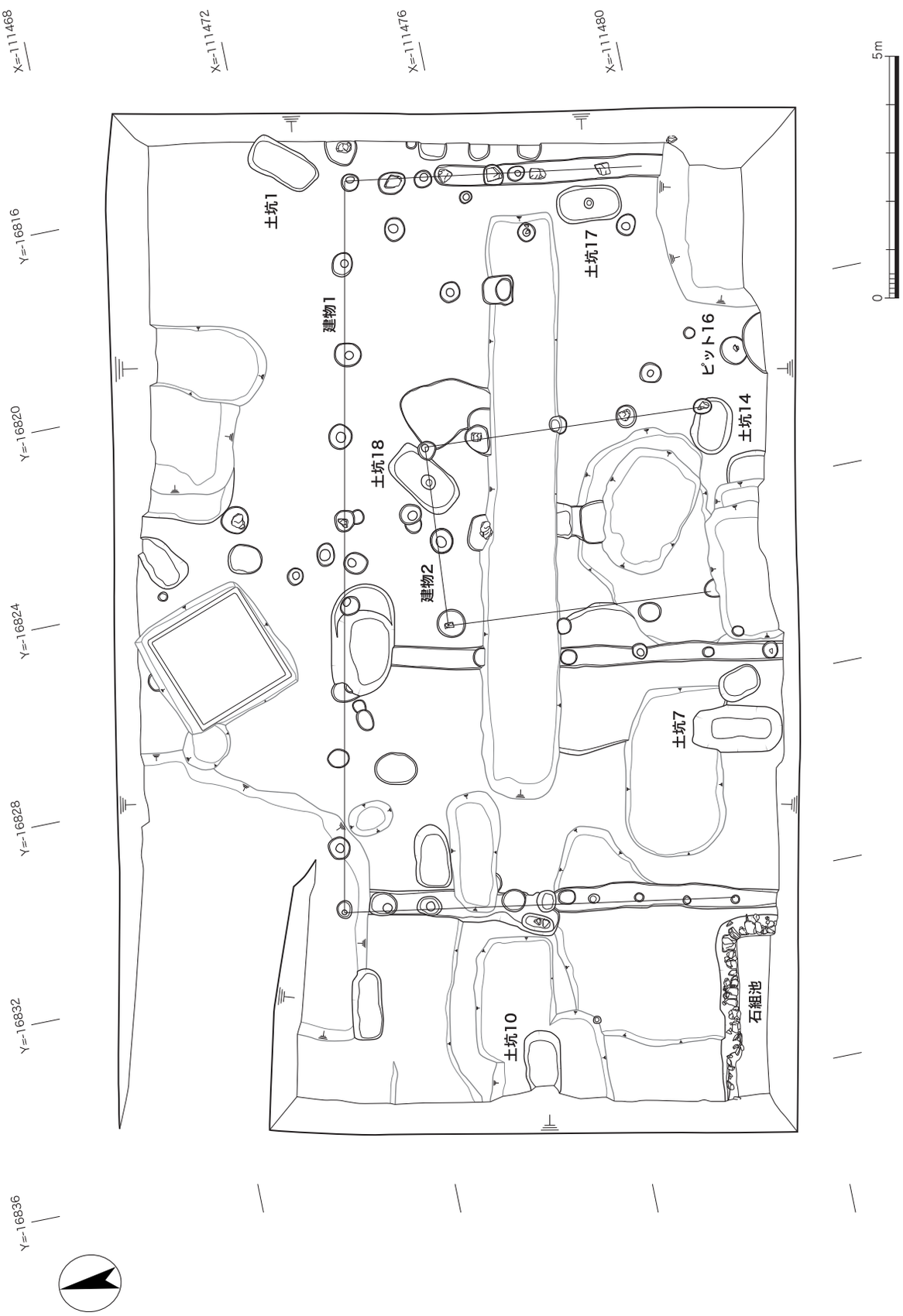


図6　第1面平面図(1：120)

土坑１（図７・図版３－１）　調査区北東部で検出した長方形の土坑で、縦 1.45m、横 0.7m、深さ 0.45m である。壁がほぼ垂直に立ちあがり箱形を呈する。埋土は単一で褐色砂泥層（7.5YR4/4）である。

土坑 17（図７・図版３－２）　調査区東部で検出した隅丸長方形の土坑で、縦 1.3m、横 0.7m、深さ 0.4m である。壁がほぼ垂直に立ち上がり箱形を呈する。底部中央に径 0.2m、深さ 0.1m のピットがある。土坑の埋土は褐色砂泥層（7.5YR4/4）、中央のピットは暗褐色砂泥（10YR3/4）である。

土坑 18（図７・図版３－３）　調査区の中央東寄りで検出した長方形の土坑で、縦 1.5m、横 0.8m、深さ 0.25m である。壁がほぼ垂直に立ち上がり箱形を呈する。底部中央に径 0.25m、深さ 0.35m のピットがある。土坑の埋土は褐色砂泥層（7.5YR4/4）、中央のピットは暗褐色砂泥（10YR3/4）である。

建物２（図８・図版４）　調査区の中央南寄りで検出した東西２間、南北４間以上の南北棟の掘立柱建物である。調査区の南へさらに伸びると考えられる。柱穴はほぼ円形で、規模は径 0.3 ～

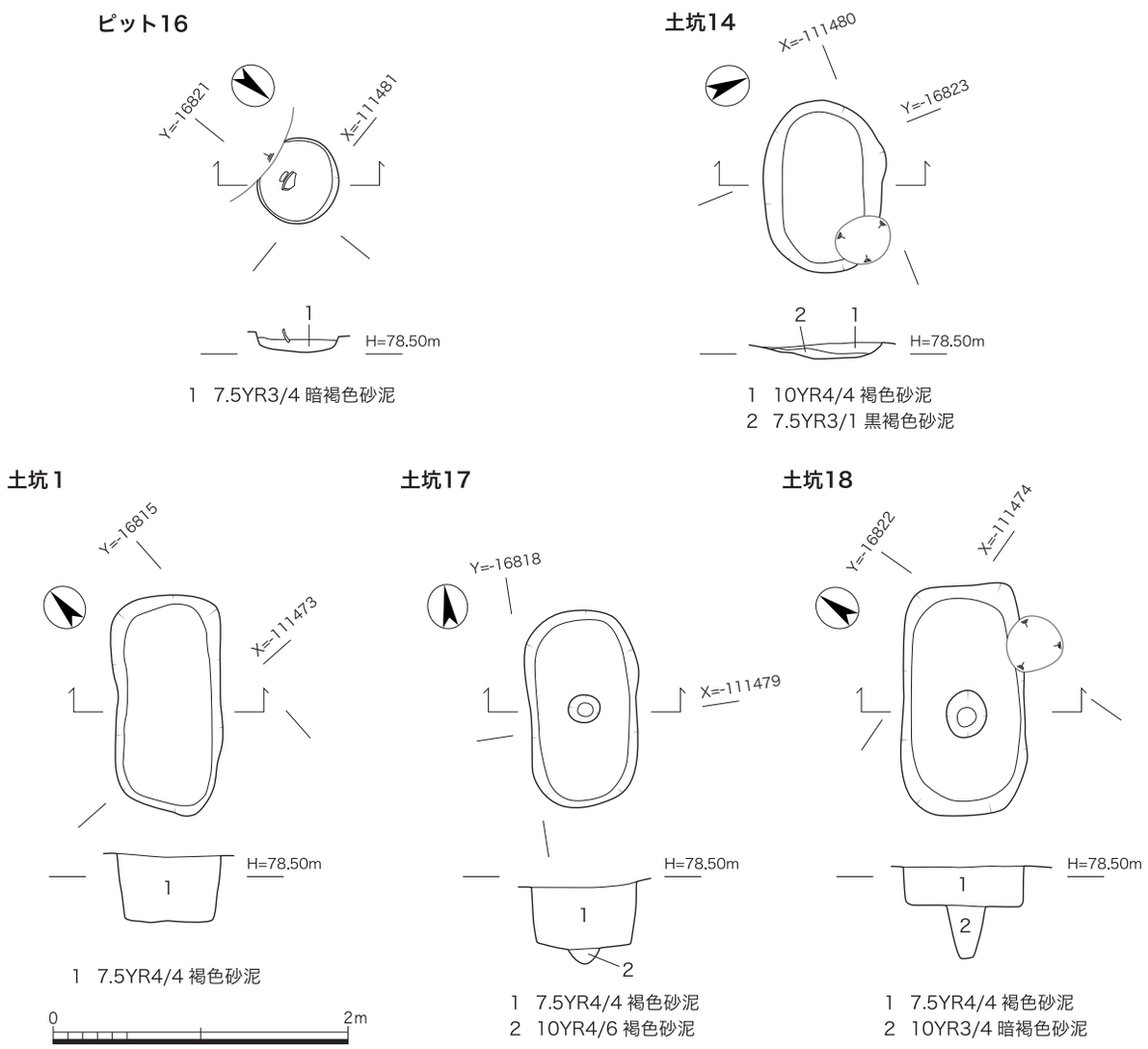
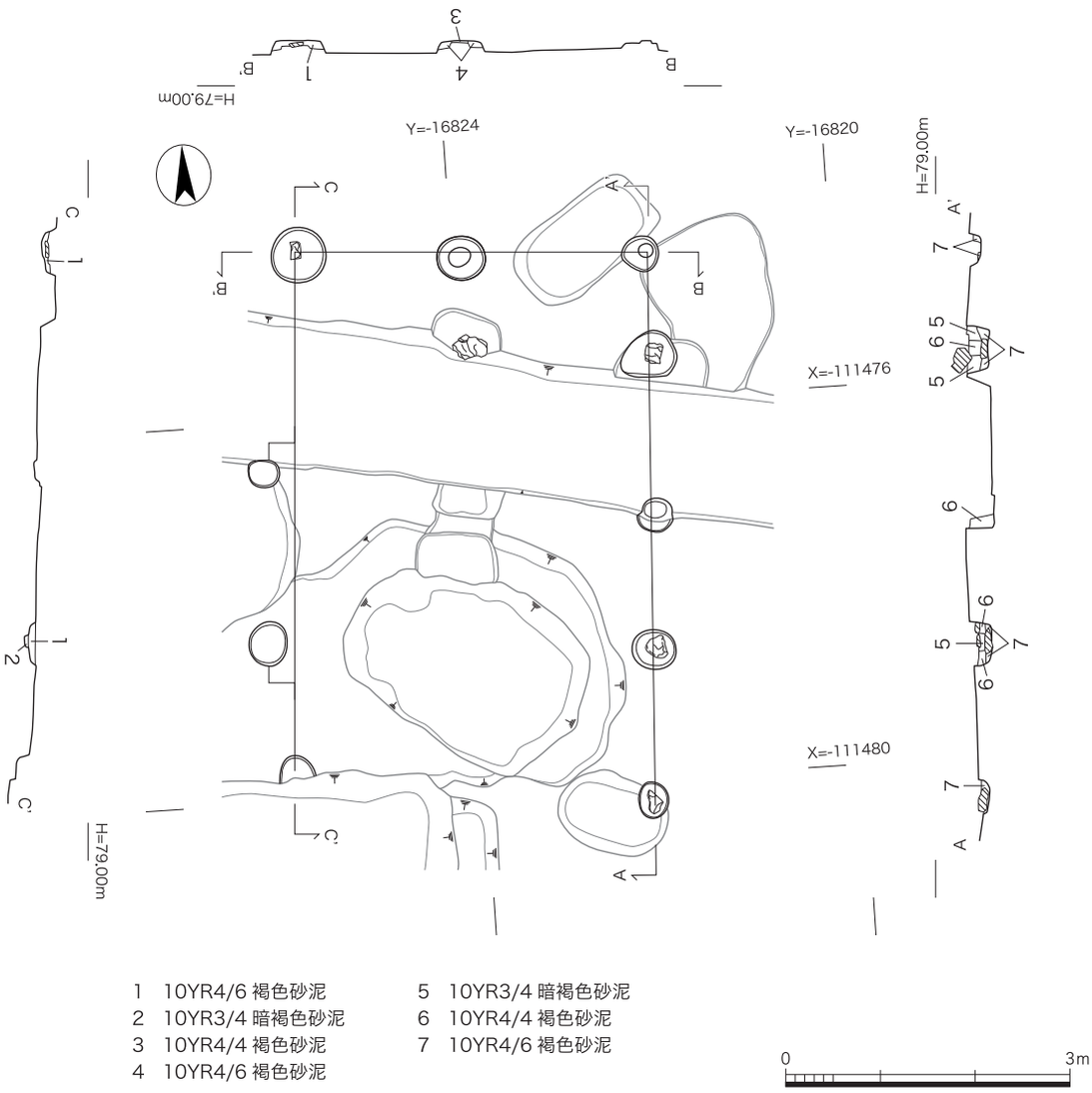


図７　ピット 16・土坑 14・１・17・18実測図（1：50）



1　10YR4/6 褐色砂泥
2　10YR3/4 暗褐色砂泥
3　10YR4/4 褐色砂泥
4　10YR4/6 褐色砂泥
5　10YR3/4 暗褐色砂泥
6　10YR4/4 褐色砂泥
7　10YR4/6 褐色砂泥

図８　建物２実測図（1：80）

0.5m、深さは 0.1 ～ 0.3m、柱間は 1.1 ～ 1.9m と不揃いである。柱穴の中には地下式礎石を持つものがある。建物方位は正方位に近い。柱穴から室町時代後期の土師器皿が出土している。

c）江戸時代から明治時代の遺構

江戸時代から明治時代の遺構は大型の建物（建物１）、とそれに付属する石組池（土坑８）がある。また、建物の廃絶に伴う廃棄土坑（土坑７・10）がある。

建物１（図９・図版５、６－１・２）　調査区のほぼ全域に広がる大型の建物である。東西 15.0m、南北 8.8m 以上で、さらに調査区の南側へ伸びると考えられる。方位は、北に対して東へ約 22 度振れている。建物の柱構造は掘立柱の部分と布掘りの部分がある。また、側柱列の他に建物の西端から 5.0m、ちょうど横幅の三分の一の位置に南北方向の柱列がもう一列存在する（中央柱列と仮称する）。南北方向の柱列はいずれも溝状の掘り込みを持つ布掘基礎となっている。東側柱列は幅 0.4m 前後の溝の中に 0.3m 前後の上面が平らな自然石を地下式礎石として並べている。礎石は５基確認でき、柱間は 0.9 ～ 1.4m と不揃いである。また、礎石の間には掘方

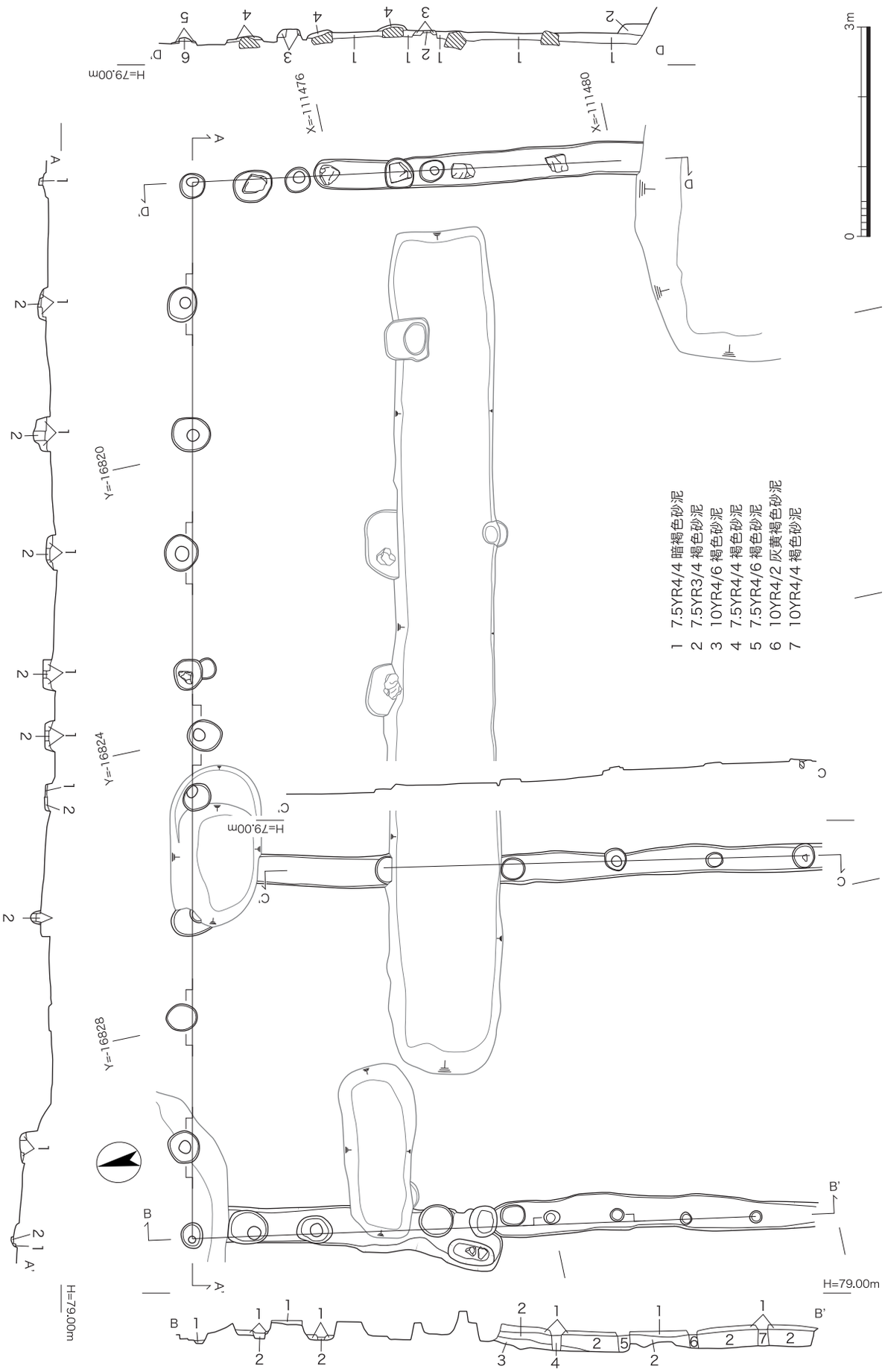
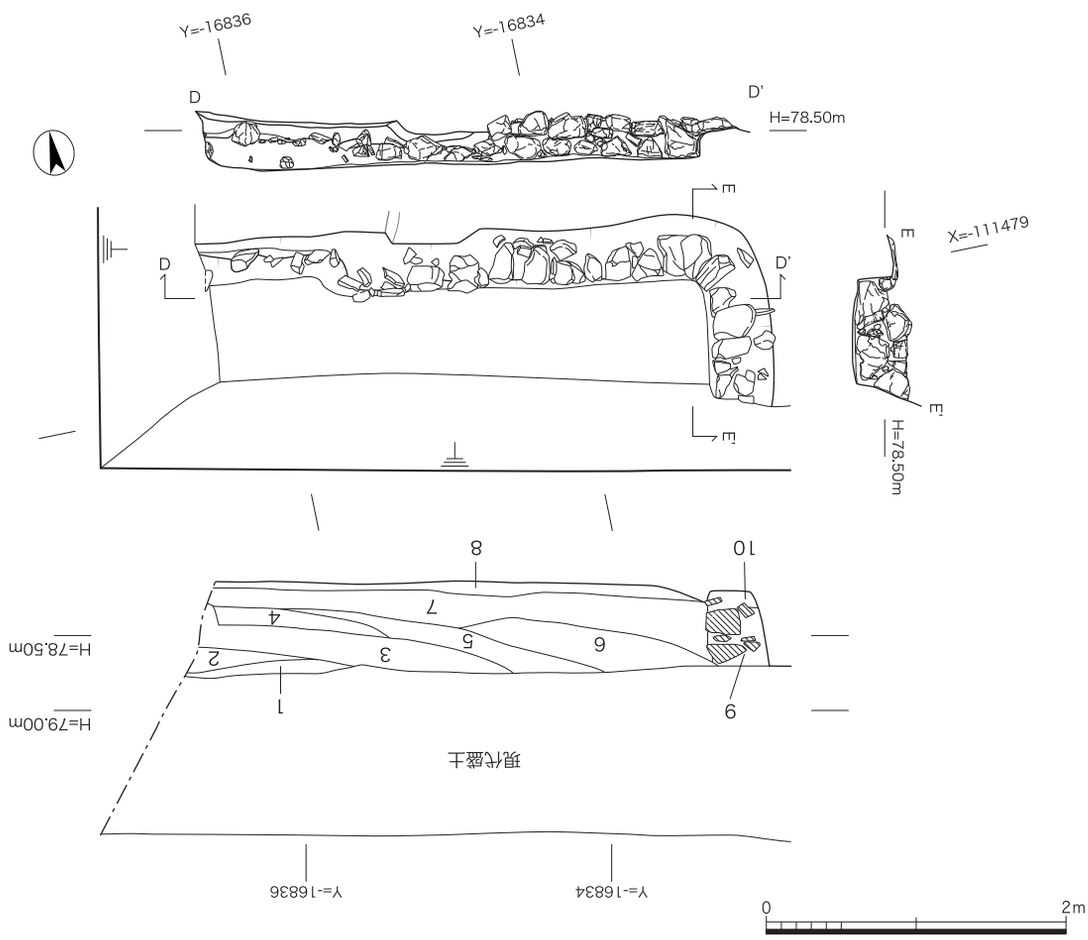


図９　建物１実測図（1：80）

を持つ柱穴があり、補修の痕跡と推定できる。西側柱列は幅 0.5m の布掘りとなっており、北半の柱は布掘り溝よりも深い掘形が掘り込まれている。南半は布掘の中に径 0.15m 前後の柱痕跡が並んでいる。柱間は 0.9m 前後である。ここには地下式礎石は認められない。中央柱列は、幅 0.4m の布掘りの中に径 0.15m 前後の柱痕跡が認められる。柱間は 1.4 ～ 1.5m である。一方、北側柱列は掘立柱式で、径 0.3 ～ 0.5m の掘方の中に径 0.15m 前後の柱痕跡が認められる。

この建物は南北方向の柱列に布掘基礎を持つことや柱痕跡が細く、柱間が狭いといった特徴から大壁造りの構造と推測する。また、中央柱列によって２間に仕切られていると考えられるが、建物関連として取り上げた柱穴以外にもいくつかの柱穴があり、さらに空間分けされていた可能性がある。また、建物の東側にも柱穴が並ぶことから東側に取りつく建物が存在する可能性がある。

土坑８（図 10・図版６－３） 調査区の南西端に接して検出した石組の池である。方形を呈すると考えられ、その北東隅部分を検出した。東西 3.5m 以上、南北 1.0m 以上、深さ 0.5m で、さらに調査区の南西に伸びると考えられる。径 0.1 ～ 0.3m の自然石の角礫を約２段積み上げて護



1　7.5YR5/8 明褐色砂泥
2　10YR4/6 褐色砂泥　礫混
3　7.5YR4/4 褐色砂泥　φ２～５㎝の礫・瓦混
4　10YR5/6 黄褐色砂泥
5　10YR4/6 褐色砂泥
6　10YR4/6 褐色砂泥
7　7.5YR4/4 褐色砂泥
8　5Y5/2 灰オリーブ色粘土（池底粘土層）
9　10YR4/6 褐色砂泥
10　7.5YR4/4 褐色砂泥

図 10　土坑８実測図（1：50）

岸としている。底部には厚さ 0.05m 前後の青灰色の粘土層を薄く敷き詰めている。当初は石室と推定していたが、深さが浅いこと、床面に粘土が貼ってあったことから池状遺構と考えた。

土坑 7　調査区の南端で検出した廃棄土坑である。長方形を呈し、長さ 1.8m 以上、幅 1.0m、深さ 0.4m である。調査区の南側にさらに伸びると考えられる。埋土には炭や灰が多く含まれている。土器類や瓦類が出土している。建物 1 と重複関係にあることから、建物 1 の廃絶時に形成されたものと推測される。

土坑 10　調査区の西端で検出した廃棄土坑である。長方形を呈し、長さ 1.2m 以上、幅 0.7m、深さ 0.3m である。調査区の西側にさらに伸びると考えられる。瓦類が出土している。

表 1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
飛鳥時代	土坑 14、ピット 16	土坑 14 は地床炉
室町時代	建物２、土坑１・17・18	
江戸時代～明治時代	建物１、土坑８、土坑７、土坑 10	土坑８は石組池

第Ⅳ章　遺物

今回の調査では飛鳥時代、鎌倉時代から明治時代まで各時代の遺物が出土しており、土器類と瓦類がある（註１）。

１．土器類（図 11、図版８）

土器類には須恵器、土師器、染付磁器、施釉陶器がある。

１・２は須恵器の蓋である。１は小型の蓋で口径 12.2㎝、器高 3.1㎝、丸みを帯びた体部の上面に宝珠形のつまみが付く、口縁端部は丸く収め、口縁部の内側に低い返りが付く。全体はロクロナデ、天井部外面はヘラケズリの後、つまみを接合した際のロクロナデが施される。天井部内面中央付近にはヨコナデが施される。焼成は良好で上面には自然釉がかかる。

２はやや大ぶりな蓋で口径 14.2㎝、器高 3.5㎝、丸みを帯びた体部上面にやや扁平な宝珠形のつまみが付く、口縁端部は丸く収め、口縁部内側に低い返りが付く。全体はロクロナデ、天井部外面はヘラケズリの後、つまみを接合した際のロクロナデが施される。焼成は良好で上面には自然釉が付く。共に飛鳥Ⅲ、７世紀後半のものと考えられる。１は近世の土坑に混入して、２は飛鳥時代のピット 16 から出土した。

３は須恵器の小型杯である。口径 3.6㎝、丸みを帯びた底部からやや外方へ直線的に立ち上がる体部からなる。口縁端部はわずかに外方へ摘み出す。全体はロクロナデ、底部外面はヘラケズリである。焼成は良好で灰白色を呈する。飛鳥Ⅲ　７世紀後半のものと考えられる。地床炉と考えられる土坑 14 から出土した。

４は土師器の皿である。体部から口縁部が残存しており、口径 14.0㎝である。外方に広がる体部から口縁はわずかに外反し端部は丸く収める。体部外面はオサエ、体部内面から、口縁部外面はヨコナデである。焼成はやや良好、色調は橙色である。京都の土師器編年 9C ～ 10A 段階、室町時代後半のものと考えられる。建物２を構成する柱穴から出土した。

５は焼塩壷の蓋である。口径 7.5㎝、器高 2.1㎝、平らな天井部と丸みを帯びた口縁部からなる。手づくねで、口縁部にヨコナデが施される。器壁は厚く、胎土に砂粒が多く含まれる。焼成は良好。土坑８（石組池）から出土した。江戸時代後期のものと考えられる。

６・７は瀬戸・美濃系の施釉陶器である。

６は壺で、底部から体部が残存する。底部の径 10.5㎝。底部は高台風に作り出され、体部は袋状にとなっている。内面にはロクロ目が明瞭に残されている。体部外面には茶褐色の釉が施され、内面にも釉が施されるが、まだらとなっている。底部は無釉である。

７は小型の椀で口径 6.5㎝、器高 4.3㎝である。底部外面には小ぶりな高台が削り出され、体部下半は袋状となり、体部上半から口縁部にかけて外反する。内面から体部外面には黄灰色の灰

釉が施された後、体部外面には鉄釉の直線文が施され、さらに全体に透明釉が施されている。共に、江戸時代末期のものと考えられる。

8は京・信楽系の施釉陶器の椀で、底部から体部下半が残存する。底部外面には小ぶりな輪高台が削り出され、体部は内湾しながら立ち上がる。体部内外面に施釉、底部高台内面は無釉である。江戸時代末期のものと考えられる。

9から14は肥前系の染付磁器である。9は皿、10・11は蓋、12・13は椀、14は八角鉢である。

9は皿で、平らな底部に薄く低い高台が付く。口径11.6㎝、高さ2.5㎝である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。内面には草文や魚文が施され、外面には唐草文が施されている。底部裏面には銘款の一部が残存している。

10・11は蓋で天井部から口縁部にかけて内湾する。天井部には輪状のつまみが付くものと考えられる。10は口径9.5㎝、口縁部内面には文様帯があり山形の幾何学文が、外面には蛸唐草風の花文が施される。11は口径11.7㎝、口縁部内面には呉須の文様帯があり、白抜きの空間に文様が施される。外面には呉須が施され人物や鳥が白抜きで表されている。内外共に濃い青色の呉須が用いられている。

12・13は椀で、いずれも高台が高く体部が外に直線的に開く、いわゆる広東椀と呼ばれるものである。12は小ぶりで底部の高台から体部は半までが残存している。高台の径は6.0㎝である。底部内面に花文が、外面には幾何学文が施される。底部裏面には形骸化した銘款がある。13は大形の広東椀で底部から体部の下半までが残存する。高台の径は6.5㎝である。内面には花鳥文外面には草文高台外面には直線文が施されている。また、底部裏面には銘款の一部が残存している。

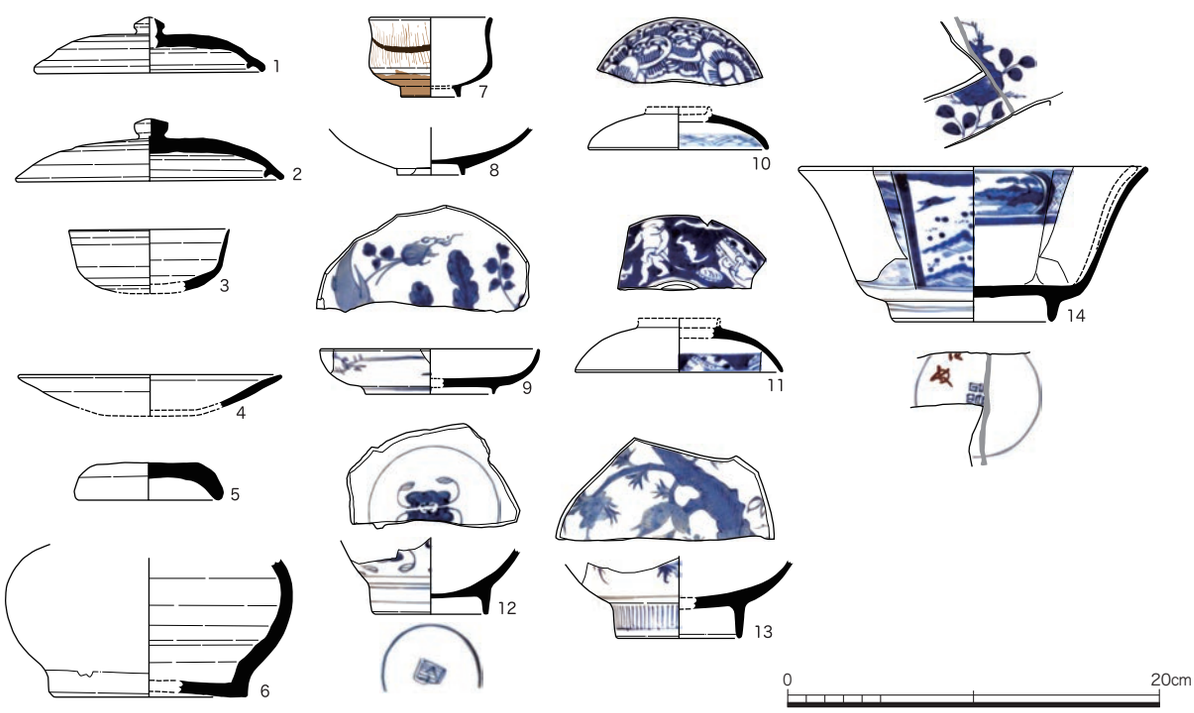


図11　出土土器実測図（1：4）

14は大ぶりの八角鉢で、口径17.5㎝、器高8.4㎝である。平らな底部には丸く高い高台が付き、体部は八角形に成形され直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。内部底面には草花文、口縁部直下には文様帯があり、窓状に区画された中に楼閣山水文が施されている。体部外面は面ごとに区画された中に文様が施されており、残存する一画にはデフォルメされた鳥や波などの文様がある。底部外面中央には形骸化した銘款があり、その脇には焼成後に施された「□ぬ」の朱漆書がある。また、器壁には焼継ぎによる補修痕が認められる。

9・10、12～14は江戸時代末期、13は明治時代のものと考えられる。

以上、6～14は土坑7から出土した。

2．瓦類（図12・13、図版9）

瓦類は軒丸瓦、鬼瓦、道具瓦等が出土しているが、図化できたものは軒丸瓦と棟込瓦で、平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代のものがある。

1は小型の軒丸瓦で、巴文とみられるが残存状況が悪く判然としない。外区には珠文が配置される。瓦当裏面はナデ、丸瓦部凸面タテナデ・凹面布目・側面タテナデである。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好で灰色、硬質である。平安時代後期のものと考えられる。土坑10から出土した。

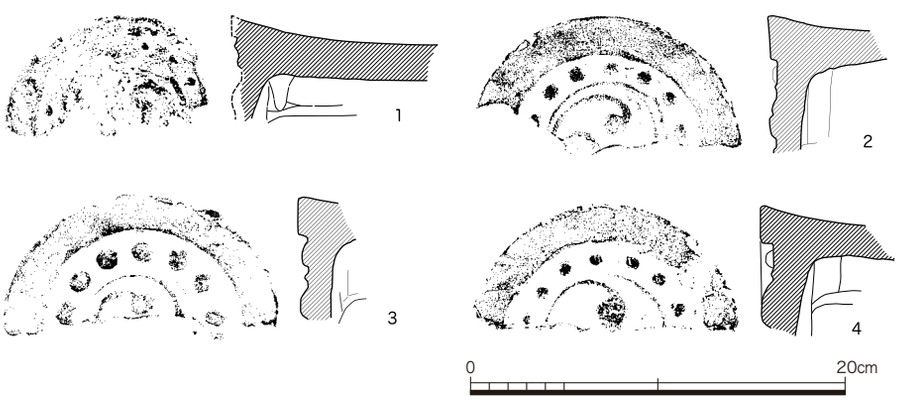


図12　出土瓦拓影・実測図（1：4）

2は巴文軒丸瓦である。右巻三巴文の頭は大きく、尾部は長く、互いに接して界線となる。外区には粒の大きな珠文が配置される。瓦当側面はヨコナデ、裏面は不定方向のナデ、丸瓦部凸面タテナデ、凹面布目である。胎土は細かく砂粒は少ない。焼成は良好で灰白色、硬質である。鎌倉時代のものと考えられる。土坑7から出土した。

3・4は巴文軒丸瓦である。3の右巻三巴文の頭は丸く、尾部は長く伸びるが互いに接しない。外区に粒の大きな珠文が配置される。瓦当側面はヨコナデ、裏面は不定方向のナデ、丸瓦部凸・凹面タテナデである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。4の右巻三巴文の頭部は大きく丸く、尾部は長く伸び互いに接して界線となる。外区に珠文が配置される。瓦当側面はヨコナデ、裏面は不定方向のナデ、丸瓦部凸面はタテナデ、凹面オサエである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。3は土坑7から、4は土坑8（石組池）の掘形から出土した。江戸時代末期から明治時代のものと考えられる。

５～８は菊花文棟込瓦である。

５･６は同文で菊花は凹弁二十四葉二重、中房はボタン状である。調整も同じで瓦当裏面の中央部はオサエ、外周に沿ってナデ、差し込み部外面はタテナデを施す。共に外径 8.1㎝。

７は外縁を持ち、菊花は凹弁八葉一重で中房は輪状をなす。瓦当裏面の中央部はオサエ、外周に沿ってナデ、差し込み部外面はタテナデを施す。外径 7.7㎝。

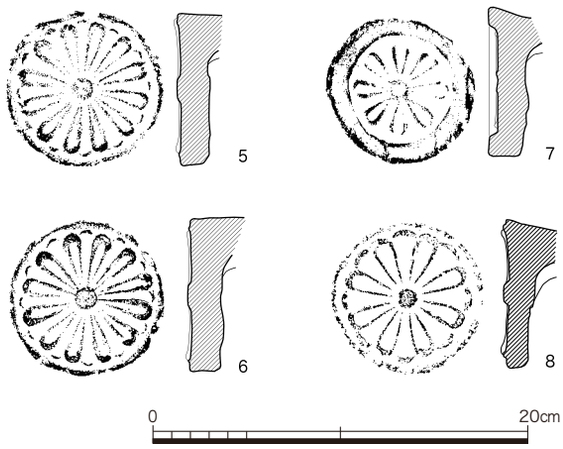


図 13　出土瓦拓影･実測図（1：４）

８の菊花は凹弁十六葉二重で中房はボタン状である。瓦当裏面はオサエ後ナデ、差し込み部外面はタテナデを施す。外径 8.0㎝。

以上、５～７は土坑７、８は土坑 10 から出土した。いずれも、江戸時代末期から明治時代のものと考えられる。

註１　土器類の年代に関しては以下を参考とした。

・『古代の土器１　都城の土器集成』古代の土器研究会編　1992年

・平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

・『九州陶磁の編年　－九州近世陶磁学会 10周年記念－』九州近世陶磁学会　2000年

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
飛鳥時代	土師器・須恵器		須恵器３点		
平安時代	瓦類		軒丸瓦１点		
鎌倉時代	瓦類		軒丸瓦１点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締、陶器、施釉陶器		土師器１点		
江戸時代～明治時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、軒丸瓦、棟込瓦		土師器１点、施釉陶器３点、染付磁器６点、軒丸瓦２点、棟込瓦４点		
合　計		４箱	22 点（1 箱）	０箱	３箱

第Ⅴ章　まとめ

今回の調査では、上述のごとく飛鳥時代、室町時代、江戸時代から明治時代と三時期の遺構を検出した。以下時期ごとにその成果を述べる。

飛鳥時代の遺構　調査区の南端で地床炉と思われる土坑とピットを検出した。いずれも飛鳥時代後期のものである。遺構は調査区の南端に分布しているが、後世にひな壇造成された際、標高の高い北部の遺構は削平されて、南部にのみ残った可能性が考えられる。

この時期には、調査区の西側には天智天皇陵が築かれ、南側には藤原鎌足が建立したと伝えられる山階寺の推定地も存在する。当地にそれらに関連した遺構が展開していてもおかしくはなく、今後周辺の調査にも注意が必要であろう。

室町時代の遺構　室町時代の遺構は土坑群（土坑１・17・18）と掘立柱建物（建物２）を検出した。上述した通り、土坑はいずれも似た構造で同時期のものと推定され、一部が建物２と重複しており、土坑が古い。したがってこの時期の遺構は土坑群と建物の２時期に分けることができよう。土坑群は規模や形状から墓壙の可能性があるが、人骨、副葬品がまったく出土していないことや底部中央にピットを持つものがあり、その性格は不明である。

一方、掘立柱建物（建物２）は柱穴から出土した土器から室町時代後期のものと考えられる。今回復元できた建物はこの一棟のみであるが、建物として復元できなかった柱穴も多くあり、この時期周辺には集落が展開していたものと推測される。なお、今回検出した建物２の方位はほぼ正方位で、条里の影響を受けているものと考えられる。

江戸時代から明治時代の遺構　大型の建物（建物１）と石組池と考えられる土坑（土坑８）を検出した。そのほか廃棄土坑（土坑７・10）を検出している。建物１と土坑８は近接して並び、方位も北に対して約 22 度東と同じ振れであることから、同一計画のもとに施工されたと考えられる。この方位は現在の安祥寺伽藍と同じで、しかも建物１は安祥寺本堂を延長した位置にあたり、密接に関係する遺構であることがわかる。ところで、今回検出した建物１は江戸時代後期から明治時代の遺構としたが、これは重複する遺構（土坑７）を建物廃絶時のものと考え、そこから出土した遺物から推測した。この時期には調査地周辺の状況を示すいくつかの資料が残されているので、それを参考に建物１の性格を考察してみたい。資料としては以下のものがある。

①　「安祥寺」『拾遺都名所図絵』天明７年（1787）
②　国土地理院仮製地形図　明治 25 年（1892）
③　国土地理院正式地形図　大正元年（1912）
④　京都市都市計画基本図　大正 11 年（1921）
⑤　京都市都市計画基本図　昭和 10 年（1915）
⑥　京都市都市計画基本図　昭和 28 年（1953）

①の資料（図 14）（註 1）は安祥寺の境内を南西方向から絵図にしたもので、山手側に多宝塔や本堂、右手に開山堂などの主要伽藍、一段下がって樹木の植わった庭が描かれている。そこから右下へ延びる参道は、現在も安祥寺の正面に通じる道路であろう。この道路右手の平場に草樹の茂る中に草ぶき屋根の建物が数棟描かれている。絵図には説明書きが記されているが不明瞭で判読できない。この草ぶき建物付近が今回の調査区と考えられるが、これに該当する遺構は今回確認できていない。

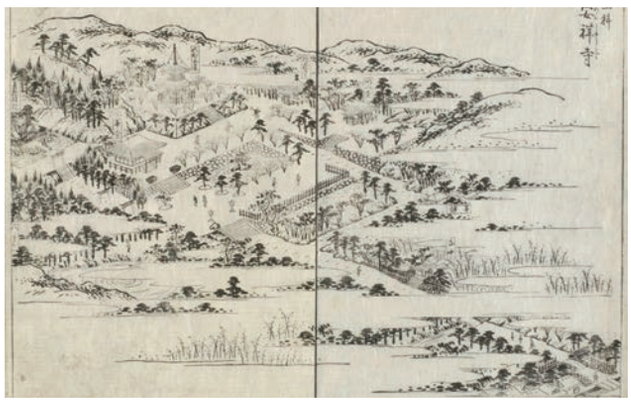


図 14　①拾遺都名所図絵

②の地形図（図 15）（註 2）には安祥寺の南側に疏水の計画線が点線で記されており、北側の安祥寺伽藍には寺院の地図記号といくつかの堂舎が描かれ、疏水計画線を挟んだ南側の平場にも寺の地図記号と建物が描かれている。南側の地図記号の場所が今回の調査地と考えられる。ここには北側に大型の建物とその東側に小型の建物が並び、さらに南側に小型の建物が記されている。

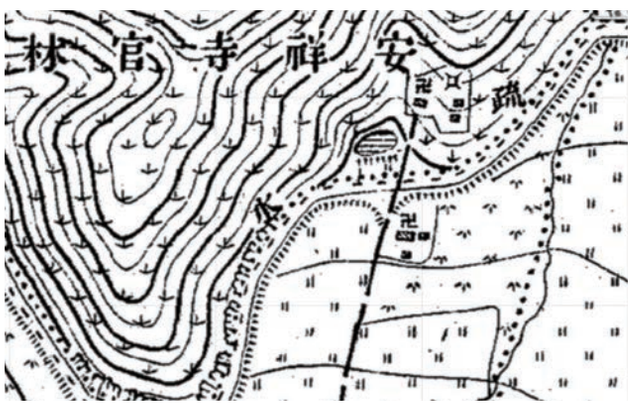


図 15　②国土地理院仮製地形図　明治 25 年

③の地形図（図 16）（註 3）には安祥寺の南側に疏水が描かれ、その南側には寺院の地図記号と 1 棟の大型建物と東と南に小型の建物が記されている。

図 16　③国土地理院正式地形図　大正元年

④の都市計画図（図 17）（註 4）には安祥寺境内と、疏水を挟んだ南側に四角い区画があり、その中に地図記号と「安祥寺」と記され、北側に東西に展開する建物群、その周辺に小型の建物が数棟描かれている。この状態は年代の新しい⑤・⑥の都市計画図においても大きな変化は見られない。

図 17　④京都市都市計画基本図　大正 11 年

これらの資料と検出した遺構を比較した結

果、建物１は建物の年代観とその位置から②と③に記された大型建物に該当すると考えられる。②と③では建物の形状が若干異なるが、配置は同じなのでこれは表現の差と捉えている。これにより、建物１は安祥寺にかかわる建物であり、資料の年代からは天明７年以降、明治 25 年以前に築造され、大正元年以降、大正 10 年以前に廃絶されたものと考えることができる（註 5）。

構造については、上述した通り大壁造りと推定される。屋根構造については廃棄土坑（土坑７・10）の遺物出土量に丸・平瓦は少なく、軒丸瓦や軒差瓦が多いことから、本瓦葺ではなく茅葺などで棟にのみ瓦を載せていたものと推測される。また、建物の西脇で検出された石組池（土坑８）は、この堂に付属する園池と推測され、建物の脇には庭園が広がっていたものと想定される。

遺構の方位について

ところで、今回検出した室町時代の建物２と江戸時代から明治時代の安祥寺関連の建物１は方位が異なっている。このことは、室町時代までは当地の条里に即した地割が存続していたことを示していると考えられる。そして江戸時代に安祥寺が復興された時点で、新たな方位が採用されたものとみることができよう。この方位がどのような由来によるものかははっきりしないが、安祥寺およびその正面につながる道路を中心とした街区と、北から延びる丘陵を挟んで西側にある天智天皇陵の参道から東に広がる街区（御陵地区）に共通していることは興味深い。

最後に、今回の調査は安祥寺下寺跡としては初の調査となった。この中で江戸時代から明治時代にかけての安祥寺に関する建物及び付属施設が確認できたことは大きな成果であった。そして、飛鳥時代や室町時代の遺構が検出できたことも、この地の歴史的変遷を知る上で重要な成果となった。一方で、安祥寺建立時から隆盛を誇った平安時代を通じた時期の遺構や遺物はほとんど出土していない。このことは安祥寺下寺本来の位置復元に重要な示唆を与えるものと考えられる。

註１　「安祥寺」『拾遺都名所図会』については大学共同利用機関法人・人間文化研究機構 国際日本文化研究センターのデータベースの画像を引用した。

註２　仮製地形図：国土地理院、明治 25年（1892）については京都市都市計画局都市企画部都市計画課の許可を得て「立命館大学立命館大学アート・リサーチセンター近代京都オーバーレイマップ」の画像を使用した。

註３　正式地形図：国土地理院、大正元年（1912）については「立命館大学アート・リサーチセンター」の許可を得て「立命館大学立命館大学アート・リサーチセンター近代京都オーバーレイマップ」の画像を使用した。

註４　京都市都市計画基本図　大正 11年（1921）については京都大学図書館の許可を得て「立命館大学立命館大学アート・リサーチセンター近代京都オーバーレイマップ」の画像を使用した。

註５　建物１は地形図資料によれば、大正時代まで存続した可能性があるが、考古資料としては明治時代までのものしか出土しておらず、ここでは明治時代までとしておく。

図　　版

1．調査区から安祥寺を望む（南から）

2．第１面全景（俯瞰）

図版2　遺構

1．第１面全景（西から）

2．土坑14（北西から）

3．ピット16土器出土状況（北東から）

1．土坑１（南西から）

2．土坑17（南から）

3．土坑18（南西から）

図版４　遺構

１．建物２（南から）

２．建物２東側柱列（北から）

３．建物２地下式礎石（南東から）

1．建物１（西から）

2．建物１西側柱列（南から）

3．建物１東側柱列（南から）

図版６　遺構

１．建物１北側柱列（西から）

２．建物１中央柱列（南から）

３．土坑８（西から）

1．第２面全景（西から）

2．風倒木跡１（南西から）

3．風倒木跡２（東から）

図版8　遺物（土器類）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

図版9　遺物（瓦類）

1

2

3

4

5

6

7

8

報告書抄録

ふりがな	あんしょうじしもでらあとはっくつちょうさほうこくしょ
書　　籍	安祥寺下寺跡発掘調査報告書
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書
シリーズ番号	第 2 集
編著者名	吉崎　伸
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会
所在地	〒603-8042 京都市上賀茂狭間町９番地３号
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会
発行年月日	２０２３年12月28日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あんしょうじしみおでらあと 安祥寺下寺跡	きょうとしやましなく 京都市山科区 みささぎひらばやしちょう 御陵平林町 20 - 2番地	26100	617	34 度 159 分 42 秒	135 度 48 分 56 秒	２０２３年 ８月７日 ～ ２０２３年 ９月28日	276 ㎡	共同住宅 新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安祥寺下寺跡	寺院跡	飛鳥時代	土坑（地床炉）	須恵器	江戸時代後期から明治時代の安祥寺にかかわる建物を検出した。
		室町時代	土坑・掘立柱建物	土師器	
		江戸時代 ～明治時代	建物・石組池	土師器・施釉陶器・染付磁器・軒丸瓦・軒込瓦	

安祥寺下寺跡発掘調査報告書

編集・発行　特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町９番地３号
℡ 075-334-5680
https://heiankyo-tyousakai.com/index.html

コンピューター・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町４丁目 273 番３
℡ 075-462-5411
http://www.comsys-kk.co.jp

発　行　日　2023 年 12 月 28 日